慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	テオドール・フルルノワ『インドから火星へ』：第6章火星の輪廻(続き)：火星語 (1) (翻訳)
Sub Title	Théodore Flournoy, Des Indes à la planète Mars : chap. 6 Le cycle martien (suite) : la langue martienne (1) (traduction)
Author	小野, 文(Ono, Aya)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2022
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.75 (2022. 10) ,p.117- 141
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20221031-0117

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

この著作物は著作権法によって保護されています／This content is protected by the Japanese Copyright Act

テオドール・フルルノワ
『インドから火星へ』

――第6章[1]火星の輪廻（続き）：火星語（1）（翻訳）――

小　野　　文

自動症のさまざまな現象のうちでも、「異言を話す」ことはいつの時代にも好奇心を強く刺激する事柄の一つであるが、異言が話されるまさにそのときに、混乱して意味も不明瞭な言葉の湧出を正しく拾い集めることの難しさから、これについて詳細な資料はほとんど存在しない。蓄音機は、ル・バロン氏[2]のような例外的な使用例はあり、おそらくいつかはこの種の研究に計り知れない貢献をしてくれることだろうが、今の時点では、通常の感覚を超えた被験者に実際に使用することを考えるのは高望みしすぎということになるだろう。こうした超感覚は意のままになるわけではなく、風変わりな言葉が発されるときに、機械が目の前に調整済みで置かれるのを待とうともしないだろうから[3]。

異言というジャンルは確かに存在する。単に支離滅裂で感情的な叫びをあいだに挟む神がかりの言葉は、ときにある種の過熱した宗教集団のなかで発

1）この章の内容は、ジュネーブ物理学・自然科学学会の1899年4月6日の会合において発表した（*Archives des sciences physiques et naturelles*, 1899, t.VIII, p. 90）。

2）*Proceedings of the Society for Psychinal Research*, 1897, vol.XII, p. 278.

3）この種の試みは、蓄音機を持参されたユージェーヌ・ドゥモール氏のご好意により、スミス嬢の交霊会でもなされたことがあるが、うまくいかなかった。

生するが、これは夢や夢遊病、精神病、あるいはこどものうちに見られる新語の創作とは別ものである。同じように、この恣意的な語の造成は、話し手自身は知らない（少なくともそう振る舞っている）が実際に存在する外国語をときに話し出すというような別の問題を引き起こす。いずれのケースにおいても、その人が自分の発する音に決められた意味を付与しているのかどうか、もしそうならどの程度なのか、自分の言葉を理解しているのか（あるいは少なくとも理解しているように見えるか）、あるいはそれは単に発声器官の機械的な発動であって意味はないのか、またあるいはこの普通の人には理解不能なジャーゴンは第二人格の思考を表現しているのか、そういうことを検討する必要がある。こうしたケースの混合、すなわち混ざったり組み合わさったりしている場合が一番多いのだが、それを抜きにしても、いずれの形態もニュアンスに富み、度合いの差が存在する。そのようなわけで同じ一人のひとのうちに、またときには同じ時と場所において、一連の新造語があらわれることがあり、それらは理解できたりできなかったり、そうかと思うと単に俗語の一貫性のない無駄話であったり、あるいは逆の順序で現れたり、という具合なのだ。

これらの異言のあらゆるカテゴリーや異種を首尾良く記述し、体系的に分類することは非常に有益であろう。しかし私はスミス嬢の火星語だけでいっぱいなので、そうした研究をここで考えることはできない。スミス嬢の夢遊病的言語は、すでに見たように、宗教的熱狂からくる神がかり的で支離滅裂なことばではなく、また実際に存在する外国語のことばでもない。それはむしろ最大の表現力を備え、体系的に実践され、明確な意味作用を持ち、通常の自我［Moi］の知らない下部人格によってなされる新造語を呈している。それは「異言生成」の典型的なケースであって、下意識活動が作り上げる完全で整った新言語なのである。私は、ケルナーとプレフォルストの女予言者にこれと似たような現象を報告する人々が、この言語能力の例のないはたらきが生みだしたもの全てを可能な限り漏れなく集め、公表してくれなかったことを、どんなに残念に思っているか分からない。おそらく一つ一つのケースは個別に見ると単なる異常例、重要性もなく恣意的な新奇のように見える

だろう。しかし心理学的な新奇品、全体でみるとかなり珍しい例も、数を集めて見れば、期待もしなかった新しい光を放ち始めることになるのではないか？　例外的な事実というものはしばしば最も教示を与えてくれるものであるし、発生学が奇形学からどれほどの貴重な助けを受けていることか、考えてみてほしい。

見落としという同じ間違いに陥らないように、そしてまた私が範囲を選ぶとしてもどこまですればよいのか分からないので、ここで私は、私たちが収集できた火星語のテクスト全てを報告するという決断をした。火星語のテクストを記したあとに、それに続いてこの未知の言語が私に考えを促した幾つかの注記を一段落にまとめてある。しかしこの主題を抜かりなく探究したと自賛するにはほど遠いがゆえ、誰か、より能力のある読者が、私の観察を補い訂正してくれることを望んでやまない。というのも打ち明けると、ロバがフルート演奏者だと言うのとおなじぐらいの程度で、私は言語学者で文献学者だからである。――始めるにあたって、この未知言語の表れの様々な心理学的様態について、もう少し詳細を述べたほうが良いだろう。

Ⅰ．火星語の自動症

ここでは振り返らないが、前章で私は火星語の誕生を描写し、それが火星物語そのものの誕生と分かちがたく結びついていることを記した。つまり1896年2月2日からこの年の11月2日の交霊会でエズナルを介して翻訳の作業が始められるまでである。何ヶ月もの間ずっと、この最初の年のあいだに見たところでは、火星語は次の二つの心理学的出現形態を取るだけであった。

1. 聴覚言語自動症、すなわちほとんど完全に起きている状態での、ヴィジョンを伴った聴覚の幻覚である。自発的なヴィジョンの場合、エレーヌは、その最中かあるいはその直後、鉛筆をとり、彼女の耳を打つ不可解な音を書き取っている。しかし残念ながら彼女は多くを逃しており、時にはこの夢の人物が彼女に語りかける言葉のうち最初か最後の文章のみ、あるいは彼らが話し合っている会話のばらばらの断片しか拾い集められないことがある。こ

うした断片そのものも、しばしば不正確なものを含むので、あとで翻訳がなされる際に訂正することになる。エズナルはフランス語の対応語を教えるまえに火星語の一語一語をはっきりと発音するよい習慣を持っているからである。彼女が交霊会の最中に見るヴィジョンの場合、エレーヌは聞いた言葉を理解しないままに即座に繰り返し、それをどうにか書き取るのは出席者である。

2. 発声自動症（煩雑な公式用語に従えば、「発声言語運動」幻覚）。ここでもやはり出席者が、トランス状態で発せられる奇妙な言葉をできる限り拾い集めるのだが、これは僅かなものに限られてしまう。というのもエレーヌは火星の状態にいるときにはしばしば絶望的な饒舌さでおしゃべりするからである。そのうえ、後でエズナルが翻訳してくれる、比較的はっきりして短く文章と、速くて混乱した訳の分からない言葉との区別をしなければならない。後者は決して意味作用が得られないだろう。なぜならおそらく実際には意味作用など全くないのであって、それは偽言語にすぎないからである（[原著] 145–146 頁）。

新しいコミュニケーションの手段、書き言葉が、1897 年 8 月から日の目を見ることになった。これは話し言葉よりも 18 ヶ月遅れてということになる（これは話しはじめる前に長いこと書いていたレオポールとは逆である）。書き言葉もまた同じように、すでに述べた二つのケースと相似するかたちで二種の形態として生まれ、ことばの心理学的様態の古典的な四重奏（カルテット）を完成したのである。

3. 視覚言語自動症、すなわち覚醒しているエレーヌの目の前に現れるエキゾチックな文字のことで、エレーヌはこの神秘的なヒエログリフが何を意味するのかは解らないまま、それを可能な限り忠実にデッサンのようにして写し取っている。

4. 書記自動症、これは完全にトランス状態で、かつ火星人に受肉しているエレーヌの手によって筆記された書き言葉である。このケースでは、文字は一般的に前項のケースのデッサンよりも小さく、より規則的で、かたちも良い。幾度か、エレーヌが書く前に文章を発音した機会に、そしてとりわけ翻訳のときのエズナルの発音によって、火星語の発声音と書記記号の間の関係を確信をもって打ち立てることができた。

注記すべきは、この四つの火星語の自動症の表れは、スミス嬢の通常の人格に損害を与えるとしても、同じ程度でもってではないということである。通例では、聴覚言語と視覚言語の幻覚［訳注：上記 1 と 3］は、エレーヌのうちにじっさいの現実意識を少しも消し去らない。幻覚があってもエレーヌのなかには、こうした自動症を思慮深く観察し、記憶に刻み、描写したり写し取ったりしながら、しばしば一定の批判的な感覚を証立てるような注意書きを交える、そうした精神の自由さが、完全とは言わないまでも残っている。それとは反対に、発声言語と書記言語の幻覚［訳注：上記 2 と 4］の場合、エレーヌにおいては、覚醒状態のままでいる状態とは両立しないようで、そこから催眠状態が続く。彼女の手が機械的に書いているとき、エレーヌはつねに完全に放心状態にあるかトランス状態にあるかであり、非常に稀にこうした完全な霊肉分離状態の外で火星語を機械的に話すことがあったとしても、自分では全く気づいていないし思い出しもしない。自らの参与なしに自分の手が動くのを意識的に眺める霊媒たちのケース、あるいはもっと稀ではあるが、見知らぬ言葉を自分が発するのを驚きをもって聞き、書き取るというような被験者のケースに、エレーヌがいつか該当するようになるのか私は知らない[4)]。スミス嬢の通常の人格のときに、自らの発声自動症を即座に観察し、それを記憶するのが不可能であるという事実は、聴覚自動症や視覚自動症の状態よりも深いところでの混乱を示している。非＝自我の知的で客観的な

4）W. ジェームズによって発表された、ル・バロン氏の不思議な自己観察「“異言”を含む心霊自動症の一ケース」を参照のこと。*Proceed. S.P.R.*, XII, p. 277.

表象にとりわけ役立つ視覚的・聴覚的与件とは逆に、私たちの感覚・図像運動が私たちの人格形成のうえに果たす重要な役割を考えてみれば、この違いは理解できる――むしろどうしてこれがより普遍的に拡がっていないのか、不思議なぐらいである。このように視覚と聴覚の連鎖は、エレーヌのふだんの自我にそれほど揺さぶりをかけることなく機械的に発展できるのだが、それとは反対に運動感覚の中枢の一部分、とくに話し言葉と書き言葉に使われるものは私たちに非常に近いところにあるのだから、それが第二の人格によって専有されると、自我はかなり混乱させられる。

火星の書き言葉は、ところどころに顔を出しつつ長い準備期間を経た後にしか現れなかったが、少なくとも 1 年半の間、外部からの促しに刺激されていたことは確かである。以下がこの進展の主要な経緯である。

1896 年 2 月 16 日。火星という惑星に特別な書き言葉がある、という驚くべき事実が、半トランス状態にあったエレーヌが、報告書を書くためにノートを取っていた R 氏（[原著] 147 頁）を見てびっくりした様子から分かる。この驚きは、書かれた文字というよりは鉛筆とその持ち方に関係しているようであった。

11 月 2 日。エズナルの翻訳のシーンの後で（[原著] 151 頁）、火星のトランス状態にあったエレーヌから漏れ出た言葉「アスタネは私に書き方を教えてくれる」から、書き言葉がはっきりと予告される。

11 月 8 日。文章 3 の翻訳の後で、質問されたレオポールは左手で答え、アスタネはスミス嬢に文章を書かせるだろうと言うが、この予言は実現しなかった。

1897 年 5 月 23 日。火星の書き言葉の予告はより明確になる。「まもなく――とアスタネはエレーヌに言う――お前は我々の文字をなぞり、我々のことばの徴を手中にするだろう」（文章 12）。

6 月 18 日。エレーヌを訪ねたとき、私たちは火星語について話し、私の頼みで、エレーヌは鉛筆をもって、自動的に記号が書けないかどうか見てみる。彼女は鉛筆が自分で（彼女の無意識の指の動きで）人差し指の背にきて、

まるでそこにくっつきたいようだ、と感じる。次に彼女は、指の先を囲みつつ短い先端を持つような輪っかが見えると思う。彼女は何も書かなかったが、しばらくして鉛筆を離し、それを指ではじいて遠くに押しやる。それからしだいに火星のヴィジョンに入っていき、文章 14 を聞くことになる。

6 月 20 日。交霊会の始めに、半覚醒状態でみる火星のヴィジョンで、彼女は想像上の対話の相手に向かって、「書くときに使われている、とがったところのある大きめの指輪」を要求する。この描写は R 氏に、彼の自宅の、人差し指の先で調節できる、この種の小さなつけペンを想起させる。

6 月 23 日。R 氏が彼女のためにと送ってくれた小さなつけペンを、私はエレーヌに持たせてみるが、残念ながら彼女はそれを気に入らなかったようである。彼女はそれを「重すぎるし、ずんぐりしてて、本物の煙突みたいに太い……等々」と思ったようだ。エレーヌはそれでもそれを人差し指の先に付けてみることに同意したが、無駄な努力に終わり、それを抜いて鉛筆を取り、もし火星語が書かれるのであれば、それはこの異様なつけペンではなく、ふつうの鉛筆でもいいはずだ、と言った。しばらくすると彼女は眠りに陥り、彼女の手は無意識にレオポールの筆跡のメッセージをなぞりはじめる。私はレオポールに、R 氏のつけペンは火星語筆記の要請を満たしていないのか、また以前何度も予告されたように、スミス嬢はいつかこの言葉を書くようになるのか、と尋ねる。すぐにもエレーヌの手は、レオポールの見事な筆跡でこう答える。

> 私はまだ火星の住人が言葉を書くときに使っている道具を見たことがないが、私が君に言えることは、物事は、それが予告されたとおり、到来するだろう、ということだ――レオポール。

しばらくして、エレーヌは記憶喪失状態から目覚める。

6 月 27 日。文章 15 の翻訳の場面で、エレーヌはいつもの言葉に付け足して言う。「エズナル、彼は行ってしまった、もうすぐ彼は戻ってくるわ、もうすぐ彼は書くわ」。人差し指で、レオポールは私たちに、まもなく火星の

書き言葉が明らかにされるだろうが、今夜ではない、と知らせる。

8 月 3 日。午後 4 時から 5 時のあいだ、事務所にいるときに、エレーヌは 10 分から 15 分、幅広で水平になった棒状のもののヴィジョンを見る。それは火の色で、次にレンガ色になり、少しずつピンクの色合いになっていったが、その上に奇妙な文字がたくさん浮き出ており、地の色から、彼女はそれが火星の文字ではないかと思う。これらの文字は、彼女の前や周りの空中を漂う。続く数週間のあいだ、同じようなヴィジョンが繰り返される。

8 月 22 日。非常に詳細なルメートル氏の報告書から、この場面を要約することにする（私はそこに居合わせなかった）。ここでエレーヌは初めて、視覚言語的幻覚から写し取った火星語を書くのである。

火星以外の様々なヴィジョンの後で、スミス嬢は窓のようを向き（土砂降りの雨が降っており、外は灰色だった）、叫んで言う。

> まあ、見てください！　全てが真っ赤だわ！　もう日の沈む時間なのかしら。ルメートル先生、いらっしゃいます？　すっかり全部が赤いのをご覧になれますか？　アスタネがこの赤のなかにいるのが見えるけれど、アタマと指先しか見えないんです。ローブも着ていないみたい。また一緒に別の人［エズナル］が来たわ。二人とも、紙切れの上に、指先に文字を持ってる。急いで、私に紙を持ってきて！

彼女には白い紙と、輪っかになったつけペンが渡されたが、ペンのほうははねつけられた。彼女はふつうの鉛筆を受けとり、いつもの彼女のやり方で中指と人差し指のあいだにそれを挟み、そして、それぞれの文字を書く前に、窓のように見えるかりそめのモデルを注意深く眺め、今書いているのは黒い文字で三枚の紙――より正確には三つの白い筒であって、少しつぶれて短いシリンダーのようなもの――に書かれたものを見ながら単語を書いているのだと、口頭での指示を挟みながら、左から右へと三行にかけて、図 21 のような最初の文字を綴った。このシリンダーのようなものは、アスタネ、エズナル、そしてエレーヌも名前は知らないがその様子はプゼのようである第三

の人物とが、右手に持っている。その後で、エレーヌはまたアスタネが頭のうえに別の紙かシリンダーのようなもの、そして言葉も持っているのを見て、それを写し始める（［原著］183 頁の図 21 の最後の三行）。「ああ、残念だわ！――と彼女は四行目に入るところで言う――全部が一行で書かれていて、私にはもう場所はないのよ！」彼女はそこで、その下に、五行目の三つの文字を書き、それから何も言わずに六行目を付け加える。そして彼女はまた口を開く。

> なんてお宅は暗いのかしら！　日は完全に沈んだのね（外はまだ大雨である）。誰もいないわ！　なんにも見えないわ！

彼女はいま書いたばかりのものを前にじっとそれを眺め、次いでテーブルのすぐ近くにアスタネを認める。彼は新たに紙切れを彼女に見せるが、それはさきほどのものと同じと彼女は思う。

> いえ、違うわ、全く同じではないわね、ここにひとつ間違いがある（彼女は五行目の終わりのほうを見せる）……あっ！　見えなくなった！

またしばらくして彼女は付け加えて

> 彼は別のものを見せてくれて、そこにはひとつ間違いがあったけれど、見えなくなったわ。本当に難しいんです。書いているあいだ、それは私ではなくて、私は自分の腕の感覚がないんです。これは私がお店で見たのと（8 月 3 日とそれに続く数日）同じようなものね、疑問符みたいなかたちの。本当に難しかったわ、だって頭を上げると、もう文字は見えないんですもの。まるでギリシャ文字みたいな図形だったわ。頭がガチガチになって、固まってしまったみたい。

この時点では、エレーヌは、自分が醒めたばかりの昏睡状態のことを思い

出していた。そこでは火星のヴィジョンと視覚言語の文章の自動的な写しを行っていたのである。しかしもう少し後、夕方になって、ほぼ完全な記憶喪失に陥った。彼女はもうぼんやりとしか、奇妙な文字をみたことを思い出せず、また何かを書いたことは完全に忘れていた。四行目の後ろのほうにアスタネが申し入れた訂正箇所、それを彼女は把握することができなかったが、それはおそらくシマンディニ（Simandini）の n を消すことだったようだ。実際これから見るように、インドの輪廻においては、この名前の綴りに矛盾する事柄が見つかったのである。

最初に書かれた三つの単語は、それを棒状のものの上にそれぞれ持っていた、よく知られた三人の人物の名前（アスタネ、エズナル、プゼ）に相当する、という至極当然な想定は、多くの火星文字の意味価値を教えてくれたし、また最後の三つの単語の見当を付けることも可能にしてくれた。続く数日、この新しいアルファベットは他の記号を加えられてより豊かになったが、それはこの交霊会がエレーヌの日常生活のうえにもたらした反響のおかげである。エレーヌは、まだ本当の火星語ではないが、フランス語を火星文字で書くことがあり、この見知らぬヒエログリフが書かれているのを前にして、自分自身かなり驚いていた（というのも、すでに述べたように、彼女はそれを書いている瞬間には意識がなかったからである）。以下に述べるように、上記の交霊会のじつに翌日、単語ではなくて単に文字のかたちに関するものでしかないものの、この自動筆記の最初の徴候が現れる。

> 8 月 23 日。
> エレーヌは昼ごろに詳細なメモ――ここから図 22 の三つの例を借りたのだが――を私に送ってきた。ここに、と彼女は書いている、ここに今朝 10 時頃に自分に課した札書きの写しがあります。思うようには仕上げることができませんでした。ようやく今になって、2 時間近くも私を包んで離さなかったバラ色の霧から解放されたところです……

三週間後、ついに完全な火星語の自動書記が、私の家での交霊会中に現れ

た。以下がそのレジュメである。

1897年9月12日。かなり長い火星のヴィジョンの終わりに、スミス嬢はアスタネを見たが、彼は指の先に何かを持っており、彼女に書く合図をする。私は彼女に鉛筆を渡し、彼女は散々躊躇した後、火星文字を非常にゆっくり写し始める（図23）。彼女の腕を使っているのはアスタネで、彼女はこの間、完全に記憶を喪失しており、意識のない状態であった。それに対してレオポールはそこにおり、自分の存在を示す様々な合図を行う。例えば、出席者の一人が、奇妙な文字が形作られるのを見て、それを東洋の様々な文字と比較してどこからそれが来ているのかみてみようと話していると、レオポールは指で書き取りを行い、「お前たちの調査は無駄に終わるだろう」と言う。六行目の終わりごろ、彼女は半分目覚めたように見え、そして呟く。「怖くないわ、いいえ、私は怖くない！」。そして彼女はまた夢に陥り、四つの最後の言葉を書く（「それでは心配するな」という意味であり、彼女の叫びへのアスタネの返答である）。ほぼすぐに、レオポールはアスタネの代わりとなり、同じ紙に、最後のほうは乱れてはいるものの彼の特徴的な筆跡で、「お前の手を彼女の額に当てるがよい」と書く[5)]。これは私に宛てて言っており、エズナルによる翻訳の場面に移るときだと教えてくれたのである。

こうした一連の段階から、火星語の書記体系は、ゆっくりとした自己暗示作業の成果なのだと結論づけることができるだろう。そこでは特別な筆記用具やその使い方に関するアイデアが長らく支配的な役割を占めていたが、おそらく実現に問題があるということから、その後放棄されている。火星文字そのものは、まず数週間のあいだエレーヌの視覚的想像力に取り付いており、その後三人の火星人のシリンダーの上に現れたときには、かなり明確で固定し、写せるぐらいになっており、次いで彼女の書記動力器官を支配できるほ

5）注記すべきは、レオポールはこれらの語を、親指と人差し指の間に鉛筆を挟む普段の彼のやり方の代わりに、アスタネが鉛筆を持っていた指のポジションのまま、すなわち（エレーヌのやり方で）人差し指と中指の間に挟んで書いたということである。

どになった。一度外に現れてからは、これらの文字は、図 24 にアルファベットのかたちで集めておいたが、二年間のあいだ変化はしていない。しかしながら、もう少し後で語ることになる小さな混乱が示しているように、目覚めているときのエレーヌが火星文字を前にしたときが、中国語を前にしたときと同じで全くちんぷんかんぷんであるとしても、これらの文字を使っている人格は、エレーヌの人格と完全に切り離されているわけではない。彼女はじっさい非常に特徴的である文字の概観を再認できるが、文字の意味価値を知らないのであって、それゆえ読むことができないようなのである。

エレーヌの火星語書記体系は、型にはまったものではないのだが、状況に応じて文字の形態と、特にその文字の大きさに幾つかの変化が現れている。図 21 から図 32 は、ほとんどが書かれたテクストを私が再び写し取ったものであるが、それを見ると変化が分かる。火星語が視覚言語的幻覚として噴出するとき、エレーヌはそれを大きなサイズの線で写しとるが、確信がなく、書き直しや失敗がままある（図 21、26、31）。エレーヌ自身、いつも眼前にあるオリジナルのものは、自分の写しよりもっと小さく、またもっとはっきりしていると言っている。彼女の手から自動的にくるテクスト、すなわちいわば火星人自身によって書かれたものでは、文字は実際より小さく、より正確である。しかしここでも興味深い差異が観察できる。アスタネの筆跡はエズナルのものよりサイズが小さく、またラミエは最も繊細な文字を書く人である。文字の形、例えば t も、それぞれの人で全く同じ訳ではない。しかし火星人の筆跡学に突入するのはまだ早いと思われるし、それは私の後継者たちに譲るとして、私は日付に従って集められたテクストを並べてみることにしたい。

Ⅱ．火星語のテクスト[6)]

ある言語とその発音を再現するのに別な言語の文字書記体系を用いるのは、

6）文章 14 と 100 ほどの火星語の単語リストが、「ルフェビュール氏への返答」というルメートル氏の論文にすでに発表されている（*Annales des sciences psychiques*, t. VII, p. 181）。

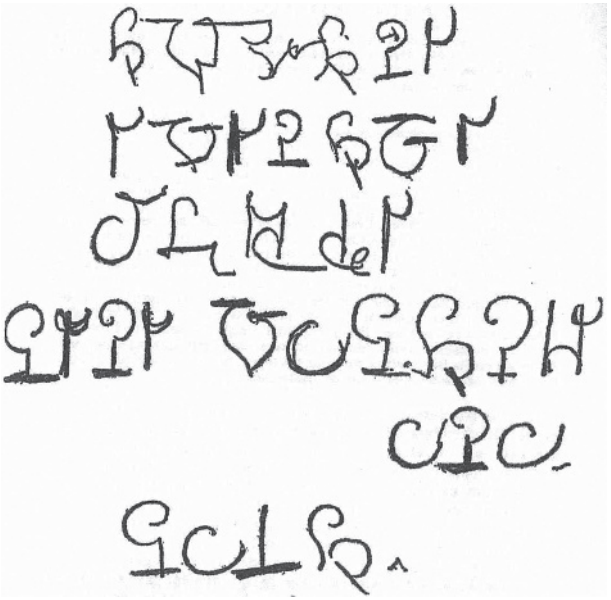

図 21　文章 16

1897 年 8 月 22 日の交霊会。スミス嬢によって書かれた最初の火星語（視覚的幻覚のあと）。実物大［ルメートル氏のコレクション］。以下がフランス語の表記。

astane
esenale
pouzé
mene simand
ini
mira

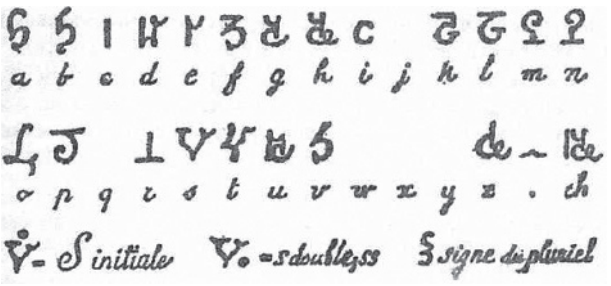

図 24　火星語のアルファベット

得られた記号すべてをまとめたもの（スミス嬢からアルファベットとして与えられたわけではない）。

なかなか容易なことではない。幸運にも火星語は、その奇妙な外観やこの赤い惑星と我々を隔てる五千万里の距離にもかかわらず、実際のところフランス語にかなり近いので、この試みは今回のケースに関してはほとんど問題とならない。

文章としては12個[7]、書かれたものとしてあるが、スミス嬢が視覚言語的幻覚のあとで写し取ったものであれ、書記動力自動症により彼女の手が即座に書き取ったものであれ、フランス語への転記はすぐさま知ることができる。なぜなら火星語の文字は私たちのアルファベットに正確な対応物を持つからである[8]。私は、エズナルが翻訳の際にした発音にしたがって、母音の上にアクセントを付けるのみにとどめた（火星語の書記体系にはアクセントはない）。よってスミス嬢の口からでた火星語の言葉をだいたいのところで再現するには、以下のテクストをフランス語のようにはっきりと発音しながら声に出して読めばいいだけである。私はたいだいのところ、と言ったが、言わずもがなのことであろうがエズナルの話し言葉には、他のどんな人とも同じように、特定の文節を強く発音したり他の文節にすべったりする話し方や単語を短くしたり長くしたり発音する、つまりは微細な強弱のニュアンスが存在しており、それは正しく再現できないものであるし、聞く者もそれを交霊会の記録に残そうと試みようともしなかった。

書き言葉としては得られず、聴きとられたり発音されたりした文章においては、エズナルの発音に従った、最もありそうな綴りを採用することにしたが、それらの絶対的正確さについて（書き言葉によって得られたもののお陰で判明した言葉以外は）、保証はもちろんできない。この点において、エレーヌが耳に聞こえた火星語の文を拾い集めて鉛筆で書くやり方は、あまり助けにはならなかった。なぜなら、上に述べたように（［原著］178 頁）、彼女は聴覚言語的幻覚の場にいて、見知らぬ言葉を聞いている人という状況にあるわけで、やっとのことで綴れる言葉でさえ、かなり恣意的で間違いも多

7）文章 16 から 20、そして 26、28、31、34、37 から 39 である。これらの文章はもう少し後で、アステリスク（＊）付きで示されている。

8）私がξの文字で写し取る、複数形の（無音）記号以外は、である。

いからである。例えば彼女は、エズナルの発音や他の書き物から類推して、*hézi darri né ciké taisse* と書き取るが、それは正しくは *êzi darié sikè tès* となる。また *misse messe as si lè* と書き取られたものは、本当は *mis mess assilé* である。それゆえエレーヌの綴りを信用するわけにはいかないが、それを退けるにいたる十分な理由がない場合には、当然のごとくそれに従った。

以下に続く文章はフランス語式に発音をするようにと言ったが、二つの注意書きを付け加える必要がある。まず文末の子音は、火星語では非常に稀なのであるが、これはつねに聞こえるように発音される。例えば *ten* はフランス語における *gluten*（グリュテン［訳注：小麦などのグルテン］）のように、*essat* は *fat*（ファット［うぬぼれの強い］）のように、*amès* は *aloès*（アロエス［植物のアロエ］）のように、*mis* と *mess* は *lis*（リス［百合］）と *mess*（メス［カトリックのミサ］）のように、等々。二番目に、e の様々な音価については、私は次のような規則を採用した。開いた e の音は、アクサン・グラーヴ［è］で；半開きの e の音は、語頭と語中、そして語尾の無音の e の直前にしか現れないが、アクサン・テギュ［é］で；閉じた e の音は、語末の場合（そして語末の無音の e の直前の場合）はアクサン・テギュ［é］で、語頭と語中の場合はアクサン・シルコンフレックス［ê］で。したがって、例えば火星語の e の音は、*mété*、*bénézée* と記された場合には、フランス語の *été*（エテ［夏］）、*répétée*（レペテ［繰り返された］）のように発音し、*êvé* と記されているときには *rêvé*（レヴェ［夢見られた］）のように、*tès* は *Lutèce*（リュテス［ルテティア］）のように発音する。

火星語の文章の下に、イタリック体で対応するフランス語の語を付けたが、それはすでに述べたような仕方でエズナルから得られたものである（［原著］151 頁）。またそれぞれの文章について、それがどのような自動記述――聴覚か、視覚か、声によるものか、文字によるものか――を記し、またそれが現れた日付と、しばしばかなり後になってであるがその文章が翻訳された交霊会の日付をカッコに入れて記した。また最後に、必要と思われる説明書き

を加えた。

（1）metiche C. médache C. métaganiche S. kin’t’che
Monsieur C. Madame C. Mademoiselle S. quatre.
C 氏、C 夫人、S 嬢、4。

声によるもの。1896 年 2 月 2 日――上記、［原著］145 頁を見ること。

（2）Modé né ci handan té mess métiche astané ké dé mé véche
Ceci est la maison du grand homme Astané que tu as vu.
これは、そなたが出会った偉大な人アスタネの家だ。

聴覚によるもの。1896 年 7 月 20 日ごろ（翻訳 11 月 2 日）。――エレーヌはこれを聞き、同時に図 12（［原著］149–150 頁）の家のヴィジョンを見た。

（3）mode iné cé di cénouitche ni êvé ché kiné line
Mère adorée, je te reconnais et suis ton petit Linel.
敬愛する母よ、私はあなたが分かります、私はあなたの子リネルです。

声によるもの。1896 年 11 月 8 日（翻訳は同日の交霊会中）――ミルベル婦人に向けられた、彼女の息子アレクシ（エズナル）の言葉で、［原著］144 頁で記述された憑依の場面と全く同じような場面。

（4）i mode mété modé modé iné palette is ché péliché ché chiré né ci ten ti vi
O mère, tendre mère, mère bien aimée, calme tout ton souci, ton fils est près de toi.
おお、母よ、優しい、愛する母、あなたの心痛を和らげて、息子はあ

なたの近くにいるのだから。

声によるもの。1896 年 11 月 29 日（翻訳は同日の交霊会中）――ミルベル婦人に向けられたエズナルの言葉で、前回の憑依の場面と同じような場面。翻訳する際に、エズナルは最後の語群を非常にはっきりと次のように繰り返した：*né ci*「～の近くに」、*ten ti vi*「あなたの」。これは明確な誤りである。というのも、後に現れる数多くの文章においては、「あなたの近くにいる」という意味は、*né ten ti vi* という語に対応しているからである。もしこれらの語が他の文章のなかで別様に訳されるのでなければ、残るは *ci* という語であるが、「そこに」「ここに」あるいは「全く」と訳されるのが自然であろう（フランス語副詞の là「そこに」と、文章 2 でフランス語定冠詞の la が ci として出てきているのとの混同が疑われるかもしれない）。

（5）i kiché ten ti si ké di êvé dé étéche mêné izé bénézée
Oh ! pourquoi près de moi ne te tiens-tu toujours, amie enfin retrouvée !
おお、なぜつねに私の傍にそなたはいないのか、ようやく巡りあえた愛しい人よ！

聴覚によるもの。1896 年 12 月 4 日（翻訳 12 月 13 日）――アスタネがエレーヌにかけた長い言葉の一部分であり、夜の 9 時ごろ彼女が就寝するときに現れた、アスタネのヴィジョンのなかの言葉である。この文章を彼は二回発話したのであるが、これはヴィジョンのすぐ後でそれを書き写したため、彼女がわりとはっきりと思い出せた唯一の文章である。彼女はアスタネが話しているあいだは、彼の話すべてを理解した気持ちでおり、それを聞きながらフランス語に、一語一語ではなく、全体の意味を捉える形で翻訳できるだろうと考えていたのである。次の日にそれを書こうとしていたのだが、朝になって目覚めてみると、アスタネの言葉もその意味も、前の晩に記したこの文章の意味さえも、忘れてしまっていた。――この文章は新たに、次の文章の後半部分として、12 月 13 日の交霊会のなかで聞き直したものである。

（6）ti iche cêné éspênié ni ti êzi atêv astané êzi
De notre belle « Espénié » et de mon être Astané, mon
我らの麗しい「エスペニエ」から、そして私の存在アスタネから、私の
érié vizé é vi... i kiché ten ti si ké di êvé
âme descend à toi… oh ! pouqoui près de moi ne te tiens-
魂はそなたに下る……おお、なぜ私の傍につねにそなたは
dé étéche mêne izé bénézée
tu toujours, amie enfin retrouvée !
いないのか、ようやく巡りあえた愛しい人よ！

聴覚によるもの。1896 年 12 月 13 日（翻訳は同日の交霊会中）。――アスタネの声が遠くから聞こえるが、彼女は顔の皮を剝がれるような苦しみの感覚を、特に目のあたりに感じ、また同じ感覚は背中、手首、両手に感じられる。翻訳文のなかで、「エスペニエ」は上記のような形で残されているが、固有名詞のようである。左の人差し指（レオポール）は、天を指さし、そしてこの固有名を「土地」「惑星」「住まい」と考えることができると言う。

（7）cé êvé plêva ti di bénèz éssat riz tès midée durée
Je suis chagrin de te retrouver vivant sur cette laide terre ;
私はこの醜い土地にそなたを見いだすのを悲しく思う；
cè ténassé riz iche éspênié vétéche ié ché atèv hêné
je voudrais sur notre Espénié voir tout ton être s'élever
我らのエスペニエにそなたの存在全てが引き上げられ
ni pové ten ti si éni zée métiché oné gudé ni zée darié gêvé
et rester près de toi ; ici les hommes sont bons et les cœurs larges.
私の傍に留まるのを見たい；ここでは人は善く、その心は広い。

聴覚によるもの。1896 年 12 月 15 日（翻訳は 1897 年 1 月 17 日）。――

朝のヴィジョンのなか、エレーヌに向けたアスタネの言葉。エレーヌは私に送った手紙のなかでこの文章をよこしたのだが、その手紙の抜粋が下に続く。この抜粋の文章は、頻繁にあるケースの好例として価値があるのだが、このような場合、スミス嬢は、見知らぬ言葉の正確な翻訳は知らないものの、その全体的意味を推測し、感情的な等価物でもってそれを理解しているのである。

> 今朝がた、5 時 45 分に、私はアスタネがベッドの足の方にいるのを垣間見ました。彼から聞こえてきた言葉をあなたに送ります……この言葉のおおまかな意味は、その時は私の心にはっきりと現れており、それを私が理解したままにあなたに渡します。つまり、できるかぎり明確に記したかぎりで、ということですが :「そなたが我たちの世界に生まれてこなかったことをどれほど悔やんでいることか。もしそうだったらそなたはもっと幸福だったろうに。私たちのところでは人も物も、すべてがよりよく出来ているし、私もそなたが再び近くにいてくれるのなら本当に幸せなのだから。」

以上が私に理解できたと思われることである。いつの日か、私たちが確かめることもできるだろう。この文章 7 は、夜を越して意味を忘れてしまったという文章 5 と比較することができる。

（8）amès mis tensée ladé si —— amès ten tivé avé men
Viens un instant vers moi, viens près d'un vieil ami
ちょっとこちらにおいて、この古い恋人の近くに
—— toumé ié ché pélésse —— amès somé têsé misaïné
fondre tout ton chagrin ; viens admirer ces fleurs,
そなたの憂いをはらすために。この花を愛でにおいで、
—— ké dé surès pit châmi —— izâ méta ii borêsé ti finaïmé
que tu crois sans parfum, mais pourtant si pleines de senteurs !...

香りはないと思うかもしれないけれど、香気に溢れているのだよ！……

—— izâ ii dé séïmiré

Mais si, tu comprendras !

いや本当に、分かるだろう！

聴覚と声によるもの。1897 年 1 月 31 日（翻訳は同日の交霊会中）。——エレーヌは半夢遊状態でアスタネを見るが、彼は自分の言葉を繰り返すように言う。彼女は答えて言う「でも、しっかり話してくださいね……繰り返すつもりですから……でもよく分かりません……」、そして彼女はゆっくりとそして明確に、語のグループとして、間隔を取りながら［上では——で記した］、上の文章を発話する。これらの語のグループが、六つめのものを除いては、同じ交霊会中に得られたフランス語の翻訳の区切りに相当していることに気づかれるだろう。六つめのグループの後で、エレーヌは長めの休止を入れ、こう言う「私には分からない」、そして最後の四つの語を発話するが、それは彼女の反論に対するアスタネの答えである。

（9）ané éni ké éréduté cé ilassuné té imâ ni nétiné chée durée

C’est ici que, solitaire, je m’approche du ciel et regarde la terre.

ここなのだよ、ここで独り、私は空から呼びかけ、地上を見ているのだ。

聴覚によるもの。1894 年 2 月 24 日（翻訳は 3 月 14 日）——お昼ご飯のあとで肘掛け椅子にまどろんだ状態のとき、エレーヌはこの文章を聞き、同時に一軒の家のヴィジョンを見たが、その家は井戸のようなものが縦横に走る火星の山に掘られており、それはアスタネの天文観測所であった。

（10）Simandini lé lâmi mêné kizé pavi kiz atimi

Simandini, me voici ! amie! quelle joie, quel bonheur !

シマンディニ、私はここだよ！　愛する人！　何という喜び、何という幸せ！

聴覚によるもの。1897 年 3 月 14 日（翻訳は同日の交霊会中）――次の文章を見よ。

（11）i mode duméïné modé kêvi cé mache povini poénêzé mûné é vi
O mère, ancienne mère, quand je peux arriver quelques instants vers toi
おお、母よ、かつての母、いつ私はあなたのところに束の間行けるのか
saliné éziné mimâ nikaïné mode
j'oublie mes parents Nikaïné, mère !
ニカイネの私の両親を忘れて、母よ！
―― i men
―― *ô ami !*
――おお、友よ！

声によるもの。1897 年 3 月 14 日（翻訳は同日の交霊会中）。――会が始まるやいなや、エレーヌは手が冷えると言い、泣きたい気持ちと次第に強くなる耳鳴りを訴えるなかで、アスタネが彼女に火星語で文章 10 を話しかけるのを聞く。ほどなくして、彼女は完全な夢遊状態に入る。浅く切れ切れの呼吸が、一秒につき三回にまで速まり、それに伴って同時に左の薬指が動く。そして彼女は息を吐きながら突然動きをとめ、つづいて深い霊感状態に入る。上体はまた真っ直ぐになり、相貌は苦しみを表現し、左の人差し指は、エズナル［アレクシ・ミルベル］が憑依しているのだと知らせる。一連の痙攣としゃくりあげる呼吸の後に、エレーヌは立ち上がり、ミルベル婦人の後ろに移動し、首元に両手を置いて、自分の頭を彼女の頭に傾け、頬を優しくなでて、文章 11 の言葉（最後の二語を除く）をかける。それから彼女は頭を起こし、再び切れ切れの呼吸を始め（16 秒に 30 呼吸まで速まった）、ルメートル氏［アレクシ・ミルベルは亡くなったときルメートル氏の生徒だった］の方を向く。彼女は両肩に手を置き、次に彼の右手を愛情深くとり、それから感情のこもった嗚咽声で、*i men !* という二語を彼に投げかける。その後で、

ジェスチャーでレオポールの手を執る仕草をしたあと、彼に導かれるままソファに行き、そこで私たちはお馴染みのやり方で、でも苦労しながら、文章10、11、そして9の翻訳を得たのである。

（12）lassuné ké nipuné ani tis dé machir mirivé iche manir
Approche, ne crains pas ; bientôt tu pourras tracer notre écriture,
近づいて、怖がらないで。もうすぐそなたは私たちの書き言葉を写せるようになる、
sé dé évenir toué chi amiché zé forimé ti viche tarviné
et tu posséderas dans tes mains les marques de notre langage.
そして私たちの言葉の徴を手中にするだろう。

聴覚によるもの。1897年5月23日（翻訳は同日の交霊会中）。――交霊会が始まって程なくして、まだ目覚めたままのエレーヌは、アスタネのヴィジョンを見たが、彼は上の言葉を彼女に話し、彼女はそれをゆっくりとかよわい声で繰り返す。ここにある文章は、複数の出席者がその時と直後の翻訳の際に聞こえたものを統一した形で記したものである。しかしながらアスタネは、後に書かれることになる文章と一致するように、幾つもの訂正を要求する。*ké nipuné ani*「そして怖がらないで」のところは、*kié nipuné ani*「怖がらないで」と直されるべきだったようだ（文章17を参照）。*sé* あるいは *cé* は、ここでしか「そして」という意味で現れず、他のところでは *ni* で表される。*viche* は *iche* の間違い（他に例はないが、ここには音調を整える「イ」の音があるのかもしれない）、*tis* は *tiche* の間違いである。

（13）adel ané sini（yestad）i astané cé fimès astané mirâ
C'est vous, ô Astané, je meurs, Astané, adieu !
あなたなのですね、おおアスタネ、私は死ぬわ、アスタネ、さようなら！

声によるもの。一つ前の文章と同じ交霊会で、その後エレーヌは完全な夢遊状態に入り、泣き出して息を切らし、手を胸にあてて、二つの語 *Adel*、*yestad* をこの文章に混ぜて発音したが、この二語は火星語ではなく、東洋の輪廻に関係するものである。それで、翻訳される時に文章が繰り返されたなかでは、この二つは再び現れることはなかった。火星の夢への異質な語の割り込みは、インドの場面がいつでも飛び出す準備ができていることから説明できる。交霊会の後半はそれに占められ、そこではアデルという名のアラビア人の召使いが大活躍したからである。二つの物語の混じり合いは、もうしばらくすると長い話のなかではかなり強くなってきて、r 音がなくなり、シュー音が増え、あまりの饒舌さゆえに一語でそれを記録するのは不可能になった。交流会の終わりの翻訳の際には、この長台詞（あるいは少なくとも類似のペチャクチャ）はひと息に、同じく記録不可能な速さで繰り返された。それに続いて同じく一気になされたフランス語の翻訳によると、これはシマンディニの人生の記憶をエレーヌがアスタネに思い出させているところで、そこでは大いに前述のアデルが問題になっていたのである（後に見る東洋の輪廻を参照）。

（14）eupié zé palir né amé arvâ nini pédriné
Eupié, le temps est venu ; Arva nous quitte ;
ユピエ、時は来た。アルヴァは私たちを離れる。
évaï diviné lâmée ine vinâ té luné
sois heureux jusque au retour du jour.
再び日が戻るまで、幸せでいてほしい。
—— pouzé men hantiné êzi vraïni né touzé med vi ni
—— *Pouzé, ami fidèle, mon désir est même pour toi et*
——プゼ、忠実な友よ、君と君の息子サイネに向ける願いは
ché chiré saïné —— ké zalisé éassé mianiné ni di daziné
ton fils Saïné —— Que l'élément entier t'enveloppe et te garde
同じ——エレメントの全てが君を包み、君を守るように

—— eupié —— pouzé
—— *Eupié* —— *Pouzé !*
——ユピエ ——プゼ！

聴覚によるもの。1897 年 6 月 18 日（6 月 20 日翻訳）。——私がスミス嬢宅を訪れていたあいだ、彼女はヴィジョンを見たが、そのなかでは火星の人物が二人、湖のほとりを散歩しており、彼女はこの会話の切れ端が彼らの間で交わされるのを聞いて、それを繰り返す。別の文章（20）によると、アルヴァとは太陽を指す火星語である。

（15）modé tatinée cé ké marche radziré zé tarvini va
Mère chérie, je ne puis prononcer le langage où
愛しい母、私はもうことばを発話できない、そのことばで私たちは
nini nini triménêni ii adzi cé zé seïmiré vétiche
nous nous comprenions si bien ! Je le comprends cependant ;
あんなによく理解しあっていたというのに！　でもそのことばを理解はできる。
i modé inée kévi bérimir m hed kévi machiri cé di triné
ô mère adorée, quand reviendra-t-il ? Quand pourrai-je te parler
おお、敬愛する母、ことばはいつ戻ってくるだろうか？　いつ私は
ti éstotiné ni bazée animina i modé cé méï adzi
de ma dernière et courte existence ? O mère, je t'ai bien
あなたに私の最後の短い生を語ることができよう？　おお母よ、私は
ilinée i modé inée cé ké lé nazère ani
reconnue, ô mère adorée, je ne me trompe pas !
あなたがよく分かる、おお敬愛する母、私が間違うことはない！
—— mirâ modé itatinée mirâ mirâ mirâ
—— *Adieu mère chérie, adieu, adieu, adieu !*
——さようなら、愛しい母、さようなら、さようなら、さようなら！

聴覚によるもの。1897 年 6 月 27 日（翻訳は同日の交霊会中）。――ミルベル夫人が出席しており、エレーヌは、エズナルが彼の母親の近くに立ってこの言葉をかけているのに気づく。最後のさようならの挨拶はこのときにではなく、エズナルが翻訳をしてすぐに、その補足として彼によって発話された。（文章 36 を除いて）既に聞き取りされたテクストに正確に従わず、あえて新しい文章を付け加えたのはこの回だけであるが、その文章には新出の語は全くない。*itatinée* はもちろん誤りで *tatinée*（愛しい）か、*i tatinée*（おお、愛しい人）と訂正されるべきであろう。――*triménêni* のフランス語における真の対応語は、おそらく「話し合う」であろう。*éstotiné* の語を「私の最後の」と訳すのは疑問が残る、というのも「私の」は他の箇所では全て *êzé* と言われているからである。

［後半に続く］